



European and American History

西洋史学専修

西洋史学は地理的な範囲を説明するのが難しい分野です。ヨーロッパ文明の歴史がその中心的な構成要素であることは異論がないとしても、そのヨーロッパ文明は先行するオリエント、地中海世界の文明から深い刻印を受けています。また、16世紀以降、ヨーロッパ人が南北アメリカ、アジア、アフリカ、オセアニアなど世界の至るところに進出して、それらの地域にヨーロッパ文明を移植し、あるいはそれらの地域の伝統文明に多大な影響を及ぼしたことはよく知られているとおりです。本専修ではこうした地球規模での西洋文明の歴史を研究領域とし、きわめて多様なテーマについて教育と研究を行っています。個別の問題について実証的に研究しながら、それらを世界的視野で考察することができる専修だと言えるでしょう。

私たちの教育目標は、グローバル化が進む中、急速に変化する時代に対応できる、総合的な知的能力の養成です。つまり、問題発見力・情報収集力・分析力・総合力・表現力を養うことです。また現代を生き抜くもう一つの武器としての外国語、特に英語の実践的能力の習得を重視しています。学生のみなさんには、西洋史を学び、研究することで、問題を情報に基づいて深く考察するだけでなく、それを日本語と英語で、他の人びとに伝える能力を身に付けることを期待しています。

<http://www.let.osaka-u.ac.jp/seiyousi>

教員

秋田 茂 教授	あきた・しげる
藤川隆男 教授	ふじかわ・たかお
中野耕太郎 教授	なかの・こうたろう
栗原麻子 教授	くりはら・あさこ
中谷 悠 准教授	なかや・そう
Gerold Krozewski 教授	ジェロルド・クロゼウスキー
見瀬 悠 講師	みせ・はるか

どんな授業があるの？

【講義題目】

オーストラリア史・帝国史演習—ビッグ・データ—
グローバルヒストリー入門講義、1970年代—アメリカと世界
日常性の中の政治—前4世紀アテナイにおける市民社会と法廷—

【演習題目】

イギリス帝国とグローバルヒストリー
オーストラリア先住民の世界と白人侵略者の関係を
妖獣パニヤップを通じて考える
近現代史のなかのナショナリズムとアメリカ
西洋古代史史料演習—『ネアイラ弾劾』を読む—

何を学んでいるの？

西洋史学基礎A および西洋史学基礎B (1、2年生対象)

西洋の歴史に関する基礎的な知識を学ぶと同時に、歴史の研究
方法や歴史のものの考え方などについての理解を深める授業で、
共通教育で開講されています。専修の授業ではありませんが、履
修を推奨しています。Aは前近代、Bは近現代を主な対象にして
います。

西洋古代史入門・文献講読など

西洋史の古代、中世、近世、近代、現代の各時代に関して、そ
れぞれ講義・講読の科目があり、それぞれの時代の特色と歴史
研究で話題とされているテーマが広く学べます。

歴史資料学演習 (2年生対象)

歴史研究に必要な基本的な知識と技術を、実践に即して習得しま
す。研究とはどんな作業なのかという問題から始まり、テーマ設定・
仮説定立、文献の探し方・集め方、ノートの取り方から、論文執筆
・口頭発表上の注意点にいたるまで、主に西洋史研究の初学者
者を対象に、研究の実際に即した知識と技術を学ぶ授業です。

教員が選ぶ印象に残った卒業論文

18世紀前半イギリス帝国の形成と海賊討伐—ウッド・ロジャーズ による海賊掃討作戦を中心に

17世紀末—18世紀初頭のカリブ海(西インド諸島)は、海賊が
横行する「海賊活動の黄金時代」であった。スペイン継承戦争
後の1718年に、新たにバハマ総督に就任したウッド・ロジャーズ
は、海賊討伐作戦を展開し、大きな成果を収めた。本論文は、
なぜこの時点で海賊討伐が行われたのかを、イギリス本国での
商業革命の展開、その過程での海外貿易商や商船船長など「貿易
従事者」の社会的地位の向上など、イギリス帝国の社会経済
構造の変容と関連付けて論じている。(選: 秋田 茂 教授)

19世紀アメリカにおける太平洋イメージの形成—なぜペリー艦隊は 日本に来たか

幕末のペリー黒船来航を米国側の視点から再検討。なぜ1850年
代の米海軍総督ペリーが日本を目指したのかという問題を、米国の
対外関係史の文脈に位置づけなおした。特にこの出来事の背景
にある、太平洋観の変容に注目し、早くも米国が海洋通商帝国
としての道を歩み始めていたことを明らかにした。(選: 中野耕太
郎 教授)

【卒業論文題目】

ローマ期エジプトにおける兄弟姉妹婚の選択
13世紀イベリアにおける異教徒間共存のあり方
17世紀後半財政= 軍事国家としてのスウェーデン
ジョン・アダムス『擁護論』におけるスイスの「議会」と「主権」
—アメリカ建国期の国制論と共和政体を巡って—
20世紀転換期ガリツィアにおける「ポーランド」の交錯
オーストラリアにおける白豪主義の変容と崩壊
ボスニア紛争における民族対立—ローカルな対立と媒介—



学生 インタビュー

時代や地域ごとに、多彩な授業が用意されています。

なぜ、この専修に決めましたか？

M 高校時代から世界史が好きだったからです。とくにドイツ史に興味があったので、より詳しく研究したいと思って西洋史学専修に決めました。

T 私は歴史全般に関心があったので、他の専修と迷っていたのですが、明るい雰囲気にはひかれてこの専修に決めました。

いつ頃、この専修に入ろうと決めましたか？

B 1年の後期に研究室訪問で決めました。先生方が熱心に自分の話を聞いてくださり、ここなら自分の好きなことが学べそうだと思います。

O 私は専修の選択直前まで悩んでいました。でも、西洋史では扱える分野が広いので、結果的にやりたいことを研究できてよかったです。

専修の魅力は何ですか？

A 「西洋史学」と一言でいっても学生の研究している分野はかなり多様です。他の人の研究発表を通してさまざまな地域の歴史や文化を学べるのが面白いと思っています。

O 海外旅行を深く楽しめる知識も得られますね（笑）。

M どの先生も、専門分野にとどまらず守備範囲が広いので、文献の情報から歴史の見方まで、とても有益な助言をいただくことができます。

B 先生と学生の距離が近くて、なんでも気軽に質問できるところも魅力ですね。

どんな授業がありますか？

K 授業には講義と演習がありますが、この専修では演習の比重が大きいですね。演習では研究者の書いた論文や自分の研究について学生が発表し、それを踏まえて先生を含めた参加者全員

で議論します。

B 英語で自分の研究を発表するディベート演習もあります。他の演習でも外国語の文献を読む機会が多いので、語学力が身に付きます。

O 講義では、古代ギリシア史から20世紀のアメリカ史まで、各先生の研究テーマに関わる内容を深く学びます。歴史を学ぶとは、暗記ではなく考えることだということが分かります。

この専修ではどんなことを研究していますか？

K 西洋史とはいっても、中には西洋という枠組みにとらわれず、アジアとヨーロッパの関係史を研究している人もいます。政治や経済、文化など、テーマもさまざまです。時代についても、古代から現代までそれぞれの関心に沿って研究しています。自分の興味次第でなんでもできるところ…かもしれません。

B 私はプトレマイオス朝エジプトに関心があり、卒論もそれについて書いています。

研究室の雰囲気、普段の様子は？

M 研究室といっても堅苦しい雰囲気はあまりありません。昼休みの時間帯には先生方や学部生・院生が研究室で一緒にご飯を食べて、楽しくしゃべりをしています。

A 誰かが必ず研究室にいたので入りやすく、授業の合間などはお菓子を食べて行ったりします。研究に関しても、先輩や先生が親身に相談に乗ってくれます。

T 明るくてユーモア抱負、優しい方ばかりなので楽しいです。

B 先生と学生、学生のなかでも院生と学部生の距離が近く、和気藹々としています。研究の真面目な話から、就

活やアルバイト、さら

にはクリスマスの過ごし方など、研究室で繰り広げられる話題は幅広いです。

K しかし、しっかり勉強しています！この専修で学ぶのに一番大切なことは？

K まずは「楽しむ」ことだと思います。自分が楽しめるテーマを見つけることができれば、いい研究ができるはずですよ。

M そのうえで、自分の研究にどのような意義があるのか考えることが必要です。研究を進めていくと、自分の研究に意味なんてあるのか？と悩むときが来るので、前に進めるためにも研究の意義をはっきりと認識しておくことは大切です。

A もちろん、自分が研究する分野の知識を深めるということも大事なのですが、もっと大切なことは、それらの知識を自分なりの視点に立って、論理的に構成することだと思います。レポートや卒論が論理的な文章にならないと先生方から突っ込まれます。

後輩に向けて一言！

T 3年間で学ぶ内容を決めるのは大変だと思いますが、焦らずじっくり考えてください。

B 大変な分、研究室の先輩や同期とともに仲良くなれます。歴史に少しでも興味のある方、ぜひ一度研究室をのぞいてみてください！